

稲・大豆作情報（NO. 3）

Ⅰ. 水稻作況情報田の生育概況（7月16日現在）

品 種 場 所	移植日 栽植株数	年 次	現在の生育状況				概況
			草 丈 c m	茎 数 本／㎡	葉 齢	SPAD	
夢しずく 三養基郡上峰町	6/12 18.6株/㎡	本 年 平 年 平年比	51.4 69.4 (74)	530 311 (171)	9.7 10.3 (-0.6)	42.2 40.9 (+1.3)	【気象】7/9～7/16まで 平均気温：平年よりも3.6℃高い 降水量：少ない(平年比6%) 日照時間：長い(平年比51%)
さがびより 三養基郡上峰町	6/19 16.1株/㎡	本 年 平 年 平年比	33.5 41.9 (80)	213 291 (73)	8.3 9.0 (-0.7)	38.8 40.9 (-2.1)	○草丈：「夢しずく」、「さが びより」、「ヒヨクモチ」、「 ひなたまる」は平年より低い。
ヒヨクモチ 神崎市千代田町	6/21 15.8株/㎡	本 年 平 年 平年比	30.2 36.8 (82)	224 374 (60)	9.2 9.6 (-0.4)	39.5 39.9 (-0.4)	○茎数：「夢しずく」は平年よ り多く、「ひなたまる」はやや 少なく、「さがびより」、「ヒ ヨクモチ」は少ない。
ひなたまる 神崎市千代田町	6/21 18.3株/㎡	本 年 昨 年 昨年比	38.6 46.9 (82)	325 334 (97)	8.9 9.2 (-0.3)	41.5 41.7 (-0.2)	○葉齢：「ヒヨクモチ」、「ひ なたまる」は平年よりやや遅れ 、「夢しずく」、「さがびより 」は遅れている。

注1) 各品種 前作：麦 注2) 施肥及び病虫害防除は地区基準に準ずる

注3) 平年値は、過去10年間（H28～R7）の平均値

注4) ひなたまるはR7年から作付けのため、昨年との比較のみの記載になります。

◆農業試験研究センター米づくり情報3号 7月16日（抜粋）

移植 日	項目 品種	年 次	草 丈 c m	茎 数 本／㎡	葉 齢 L	葉色 SPAD	概 況 (平年または前年との比較)
6 月 18 日	夢しずく	本 年 平 年 平年比(差)	37.7 45.3 83	337 318 106	9.0 9.0 (±0)	37.6 38.2 (-0.6)	【気象】7月9日～15日まで ◆平均気温…3.8℃高い ◆日照時間…長い (平年比217%) ◆降水量…少ない (平年比2%) 【生育】 ◆草丈 全品種で低い。 ◆茎数 全品種で多い。 ◆葉齢 「ひなたまる」は少なく、「夢しず く」は平年並み、「ヒノヒカリ」、「さ がびより」、「ヒヨクモチ」はやや多 い。 ◆葉色(SPAD 値) 「夢しずく」、「ひなたまる」はやや 淡く、「ヒノヒカリ」、「さがびより」、 「ヒヨクモチ」は平年並み。
	ヒノ ヒカリ	本 年 平 年 平年比(差)	35.7 38.8 92	497 429 116	9.3 9.1 (+0.2)	39.8 40.4 (-0.6)	
	ひなた まる	本 年 平 年 平年比(差)	38.4 47.6 81	461 362 127	9.3 9.8 (-0.5)	44.0 44.4 (-0.4)	
6 月 19 日	さが びより	本 年 平 年 平年比(差)	34.9 39.1 89	410 325 126	9.2 9.0 (+0.2)	40.6 41.0 (-0.4)	
	ヒヨク モチ	本 年 平 年 平年比(差)	32.6 36.0 91	756 566 134	9.7 9.5 (+0.2)	41.4 41.7 (-0.3)	

※耕種概要等は前号参照。

2. 水稻における今後の管理

○水管理

「夢しずく」

- ・早植えの「夢しずく」（5月下旬～6月上旬移植）は、間もなく幼穂形成期を、普通期の「夢しずく」（6月中旬移植）は、7月中旬頃に幼穂形成期を迎える。
- ・幼穂形成期を迎えた圃場は中干しを終え、穂ばらみ期まで「間断冠水（2日湛水3日落水）」を実施する。その後、穂揃い期まで浅水状態で湛水を保つ。

「ヒノヒカリ」、「ひなたまる」、「さがびより」、「ヒヨクモチ」

- ・1株あたり茎数が20本以上確保できた圃場は、次ページの表1を参考に「中干し」を実施する。
なお、中干しは土に軽い亀裂が入り足跡がわずかにつく程度とし、中干し後は間断灌水を行う。
 - ・幼穂形成期以降は、稲が水を必要とする時期なので、「中干し」は遅くとも8月上旬までに終え、穂揃い期まで浅水で湛水状態を保つ。
- ※移植が遅れた圃場など、茎数が不足している圃場では、分けつ数確保のため7月下旬まで浅水管理を基本とするが、遅くとも8月5日までには中干しを終了する。

○水管理 ～ 圃場の状況に応じた水管理の徹底 ～

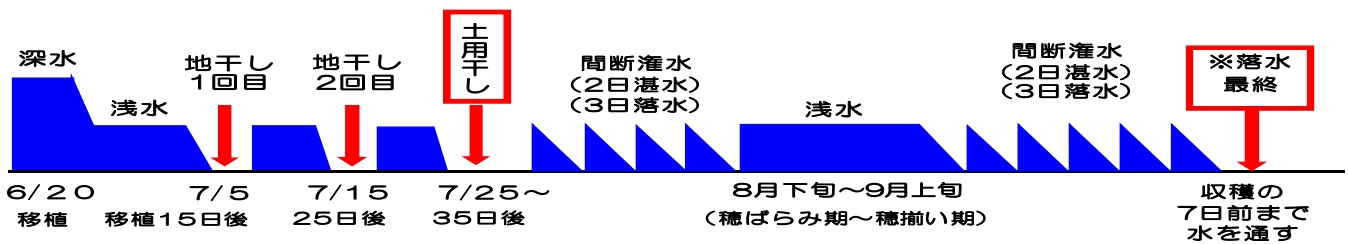


表1 品種別の中干し時期

品種	目標穂数 本/㎡	有効茎数(中干し時期)		
		50株/坪(15.2株/㎡)	60株/坪(18.2株/㎡)	70株/坪(18.2株/㎡)
夢しずく	360	24本/株	20本/株	—
コシヒカリ	370	24本/株	20本/株	—
ひなたまる	340	—	19本/株	16本/株
さがびより	370	24本/株	20本/株	—
ヒヨクモチ	440	25本/株	24本/株	—

注1) 幼穂形成期は、「ひなたまる」、「ヒノヒカリ」、「さがびより」で8月上旬頃、「ヒヨクモチ」で8月中旬頃となるため、8月上旬までは中干しを終える。

○生育状況(中干し時期の圃場のようす ～写真を参考に中干し時期を決定する～)



○雑草防除

- ・除草剤散布ができなかった圃場や散布が遅れた圃場、及び処理後に田面が露出した圃場、処理3日以内にオーバーフローした圃場等では、ヒエや広葉雑草が繁茂している圃場も見受けられる。放置すると薬剤による雑草防除が困難となるため、中後期除草剤との体系処理を検討する。なお、藻類や表層剥離が多発し除草効果の低下が懸念される圃場でも、雑草の発生が懸念されるため、圃場の状況を確認し、中後期除草剤との体系処理を検討する。

対象	除草剤名	使用時期	備考
ヒエ類	クリンチャー I 粒剤	移植後 7 日～バ ¹ エ 4L 但し、収穫 30 日前まで	湛水散布（3～4 日は湛水）
	クリンチャー EW	移植後 20 日～バ ¹ エ 6L 但し、収穫 30 日前まで	落水散布。展着剤加用。
	ヒエクリーン I 粒剤	移植後 15 日～バ ¹ エ 4L 但し、収穫 45 日前まで	湛水散布（3～4 日は湛水）
広葉雑草	バサグラン粒剤	移植後 15 日～55 日 但し収穫 60 日前まで	落水～ごく浅く湛水散布。 最低 3 日間入落水しない。
	バサグラン液剤	移植後 15 日～55 日 但し収穫 50 日前まで	高温条件下では、薬害が生じやすいのでタ方散布。
ヒエ類 および 広葉雑草	クリンチャーバス ME 液剤	移植後 15 日～バ ¹ エ 5L 但し収穫 50 日前まで	落水～ごく浅く湛水散布。最低 3 日間入落水しない。高温条件下では、薬害が生じやすいのでタ方散布。（展着剤無加用）
	フォローアップ I 粒剤	移植後 15 日～バ ¹ エ 5L （稲 4 葉期以降） 但し、収穫 60 日前まで	湛水散布（3～5 日は湛水）
	ワイドアタック SC	移植後 20 日～バ ¹ エ 6L （稲 5 葉期以降） 但し、収穫 30 日前まで	落水～ごく浅く湛水散布。（展着剤無加用）
	ロイヤント乳剤	移植後 20 日～バ ¹ エ 5L 但し、収穫 45 日前まで	落水散布～ごく浅く湛水散布。

○中間追肥（「ヒノヒカリ」、「ひなたまる」、「ヒヨクモチ」）

- ・元肥に即効性の肥料（BB480 等）を使用した場合は次の通り。
「ヒノヒカリ」「ひなたまる」：7/5～10 頃、窒素成分で 2.0 kg/10a（BB480：15kg/10a）程度
「ヒヨクモチ」：7/15 頃、窒素成分で 1.6～2.1 kg/10a（BB480：12～15kg/10a）程度

○穂肥

「夢しずく」

- ・早植えの夢しずく（5 月下旬～6 月上旬移植）では、穂肥施用時期に達している（幼穂長 1～5 mm 程度）。
- ・普通期の夢しずく（6 月中旬移植）では、間もなく幼穂形成期を迎える。
- ・幼穂形成期を迎えた圃場は中干しを終え、穂肥施用時は湛水し、その後地固めと根に空気を送るため、穂ばらみ期まで「間断冠水（2 日湛水 3 日落水）」を実施する。なお、施用時期が遅れないように表 2 の穂肥診断基準（草丈・葉色・幼穂長の確認）に基づき、穂肥を施用する。
- ・いもち病が発生している圃場は、穂肥施用によりいもち病の発生を助長する可能性があるため、施用にあたっては十分注意する。

表2.「夢しずく」穂肥診断基準

幼穂形成始期の 草丈	葉 色		施 用 時 期		穂肥施用量	
	群落	葉緑素計	出穂前	幼穂長	N成分 kg/10a	BB602 kg/10a
73cm以下	3.0以下	34以下	20～22日	1 mm	3.0	20.0
	3.0～3.5	34～38	18～20日	2 mm	3.0	20.0
	3.5～3.8	38～39	15～14日	10-15mm	1.6	10.0
	3.8以上	40以上	晩限は止葉抽出終了まで		1.0以下	6.0
73～79cm	3.0～3.5	34～38	18～20日	2 mm	1.6	10.0
	3.5～3.8	38～39	14～15日	10-15mm	1.0	6.0
	3.8以上	40以上	施 用 し な い			
80cm以上	原則として施用しない					

※草丈は、幼穂の伸長程度により幼穂形成期（1mm）を基点に、前後1日あたり1cm増減する。

※出穂前15日以降の穂肥は、玄米タンパク値を上昇させるので施用しない。

「ヒノヒカリ」「ひなたまる」

- ・「ヒノヒカリ」、「ひなたまる」は、8月上旬頃に幼穂形成期を迎え、穂肥施用時期を迎える見込みです。施用時期が遅れないように穂肥診断基準（草丈・葉色・幼穂長）に基づき、穂肥を施用する。

★「ヒノヒカリ」の穂肥施用のポイント

- ①出穂前18～20日（幼穂の長さ3～5mm）に施用。
- ②草丈が80cm以上で、葉色が濃い（SPAD値40以上）場合は施用しない。
- ③草丈が80cm以下で、葉色が薄い（SPAD値34以下）場合は、2日程度早め（出穂前22～20日で幼穂長1～2mm）に施用する。

★「ひなたまる」の穂肥施用のポイント

- ①出穂前18～20日（幼穂の長さ2～3mm程度）に施用。
- ②草丈が77cm以上で、葉色が濃い（SPAD値42以上）場合は施用しない。
- ③草丈が77cm未満で、葉色が濃い（SPAD値42以上）場合は、窒素成分で1.5 kg/10a（BB602で10 kg/10a）を施用する。
- ④草丈の高さに関らず、葉色が薄い（SPAD値42未満）場合は、窒素成分で3.0 kg/10a（BB602で20 kg/10a）を施用する。

○病虫害情報（発生および防除）

- ・セジロウンカとトビイロウンカは、6月3日頃～飛来しているが、6月20日～7月6日に主要な飛来が確認されている。（トビイロウンカ：7/1～7/6の飛来が全体の約9割を占める）
- ・コブノメイガは6月18日頃から飛来が確認されている。
- ・今後、飛来があった場合は、それぞれの地区・品種別に発生状況を確認し、防除時期の判断・適期防除に努める。
- ・今年度は斑点米カメムシの発生が平年より多く、R8年6月22日付けて早期水稻を対象とした注意報が発令された。普通期水稻においても発生状況を十分確認し、発生が認められる場合は、水稻周辺の畦畔、休耕田、空き地等の除草を出穂10日前までに実施するとともに、穂揃い期および乳熟期（穂揃い期の約10日後）の2回防除を実施する。
- ・今後、発生予測は随時更新されるため、防除の考え方等については、最新情報を農業技術防除センターのホームページで確認してください。 [佐賀県 農業技術防除センター](#)

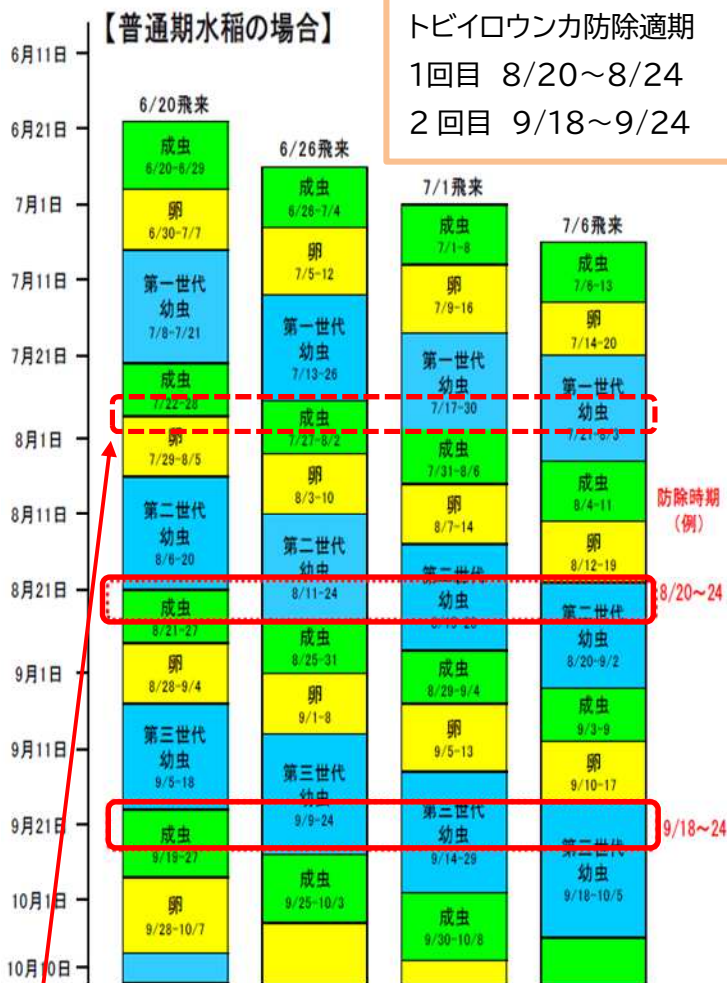


図2 普通期水稻でのトビイロウンカ各世代の発生予測 (第1版、2026年7月8日作成)



図3 コブノメイガ各世代の発生予測 (第1版、2026年7月8日作成)

※早期水稻や山間早植えの場合、防除適期は
7/25~30 頃が防除時期と予測されます。

3.大豆における今後の管理

Ⅰ 大豆の生育状況

- ・ 7月上旬に播種した圃場では、出芽期を迎えている。
- ・ 現在、多くの圃場で播種作業が進んでおり、播種深と土壤水分が適正な状況で播種された圃場では、播種後5日程度で出芽期を迎えと考えられる。



写真1、2 生育状況 (7/16撮影 7月10日播種)

- ・ 気象予報を見ると今週末は降雨が予測されているが、19日以降は晴天が続く予報となっているため、今後、播種作業を行う圃場では、圃場が耕起可能な状態になれば直ちに播種できるよう準備を行う。

参考) 週間天気予報 (佐賀県: 7月16日18時時点 佐賀地方气象台より)

17日(金)	18日(土)	19日(土)	20日(月)	21日(火)	22日(水)	23日(木)
曇 	曇 	曇時々晴 	曇時々晴 	晴時々曇 	晴時々曇 	晴時々曇 

2 播種

- 1) 大豆の播種適期は7月上中旬であるが、それ以降の播種は生育量の確保が難しくなるため、播種機を設定し栽植密度等を調整する必要がある。

播種時期 (月/日)	栽植本数 (㎡当り)	栽植様式(例) (条数)条間×株間×1株本数	播種量 (/10a)	窒素施肥量 (/10a)
7/16~7/25 ※3条は7/20以降	18本 20本	(2条)75cm×15cm×2本 (3条)50cm×20cm×2本	5~6kg	—
7/26~7/31	24本 27本	(2条)75cm×11cm×2本 (3条)50cm×15cm×2本	7~8kg	4~6kg

3 播種における主な留意点

- ・ 土中での種子の腐敗リスクを軽減するために、種子消毒 (クルザーMAXX、キヒゲン R2 フロアブル) 等を徹底し、発芽率向上に努める。

○乾燥時

- 1) 荒起しは、なるべく播種当日に行い、播種後に晴天が続く予報であれば、乾燥による発芽率低下が懸念されたため、荒起こしと播種耕起の間隔は空けないようにする。
(「4 干ばつ対策について」を参照)
- 2) 播種深度は、播種後に晴天が続く場合は5cm前後の深めにして鎮圧を行う。

○湿潤時

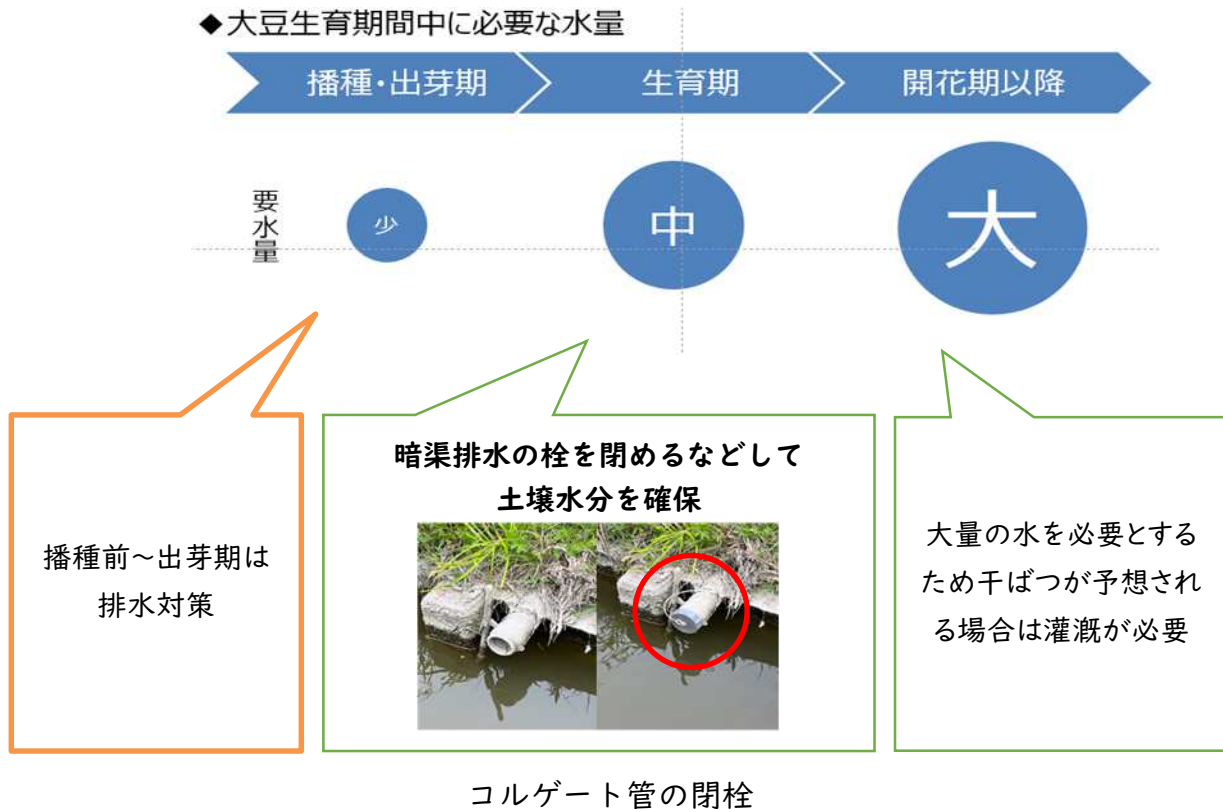
- 1) 大豆は播種後2日間の大雨や浸水で発芽率が著しく低下するため、大雨が予想される場合は播種を延期する (無理して播種しない、平うねの場合は深播きしない)。
- 2) 播種深度は、播種後に降雨が続く予報の場合2cm程度の浅めとし播種後の鎮圧は行わない。
- 3) 土壌水分が高く、耕起できない場合は麦うねを利用し、耕起を行わず直接麦うねに播種する部分浅耕播種や不耕起播種、逆転ロータリを活用した播種等の技術で播種する。
- 4) 播種作業には、「うね盛り板」をロータリに装着してうね立て播種すれば、表面排水が良くなるため、滞水による出芽不良を軽減できる。また、小うね立て播種ではさらに効果が高い。

※ 大豆は湿害を受けやすいので、播種時の乾湿に係らず、播種完了時に必ず圃場の周囲に排水路を整備する。

4 干ばつ対策について（梅雨明け後、降雨が見込めない状況の場合）

1) 播種前対策

晴天が続き高温乾燥が予測される場合、コルゲート管の閉栓が土壌水分確保に有効である。



2) 播種後対策（大豆を播種したものの、1週間程度経過しても出芽していない場合）

（1）播種後、7日程度経過した圃場では、土中の種子を掘り返し、種子の状態を確認する。

- ① 土中で出芽後に乾燥している場合、出芽しない可能性が高いため、再播種の必要がある。再播種する圃場では、播種量を増やし、生育量の確保に努める。
- ② 播種時と変わらない種子の状態で、降雨が期待できない場合、うね間灌水（注1）を検討する。

注1：うね間灌水は、夕方、日が陰ったあとに圃場に入水し、圃場に水が行き渡ったらすぐに落水し、少なくとも翌朝には完全に落水させる。日中の灌水は、高温・多湿により種子が腐敗し易い。



写真1 出芽時に腐敗した大豆（過去状況）



写真2 出芽時に乾燥した大豆（過去状況）

(2) 播種してから間もない圃場で、播種深度が想定より浅く種子周辺の土壌が乾燥している場合、梅雨明け後は高温・乾燥が続くため、速やかに畝間へ灌水しその後、速やかな排水を行う。

なお、平うねでの灌水は排水が遅延することから種子の腐敗を招くことが多いので、うね溝を設けるなどの事前作業を実施する。

注2：うね間かん水後は雑草の発生が多くなるため早めに除草剤散布等の雑草対策を行う。



写真3 大豆での畝間灌水の状況(R6.8月)

【畝間灌水のポイント】

圃場が白乾しひび割れした状態になる前に灌水を行うようにする。

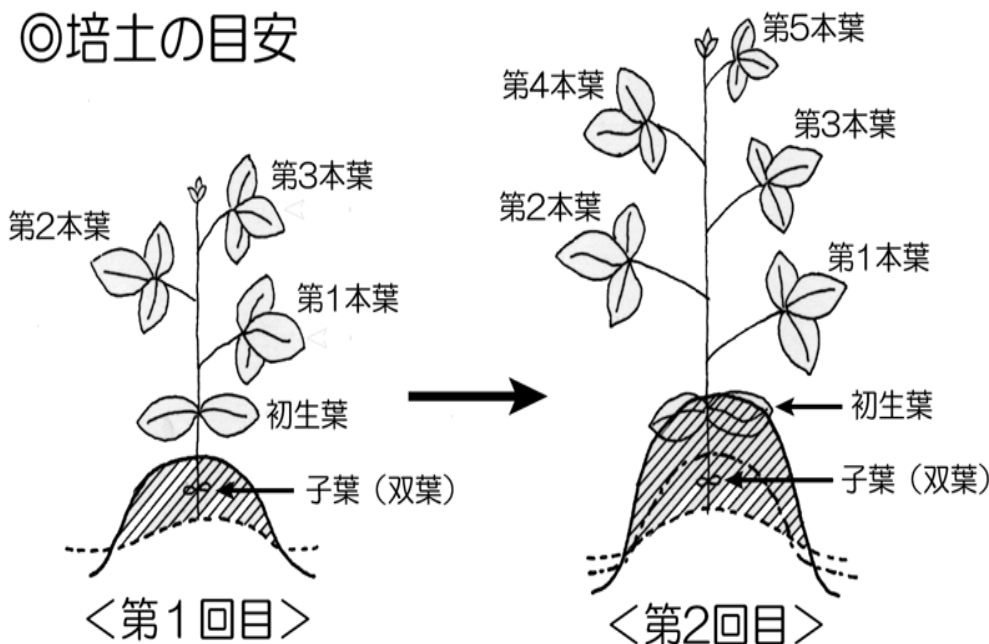
(過乾燥状態になると土壌内部に亀裂が入り、畝間灌水しても圃場の先端まで水が行き渡らない。)

5 中耕・培土の実施

・7月上旬播種 : 7月下旬には1回目の培土時期を迎える。本葉が3枚開いているのを確認したら子葉が隠れる程度まで1回目の培土を行う。

特に、降雨等で除草剤の散布ができなかった圃場では、早めの中耕培土で雑草対策を行う。

◎培土の目安



○実施時期の目安

- 1回目：本葉2～3枚の頃、子葉が隠れる程度に行う。
- 2回目：本葉4～5枚の頃、初生葉が隠れる程度に行う。

【 高温・干ばつ時の中耕・培土の注意点 】

1. 開花期近くの培土・・・×

うね間に張り出した根量が多く、大豆へのダメージが大きい。

2. 日中、高温時の作業・・・×

断根に加え、大豆の蒸散量が大きく、ダメージが大きい。

3. 株元まで土がかかっていない・・・×

培土の目的：不定根の発生 → 根粒菌の活性化、倒伏軽減

6 雑草防除

1) 播種前対策

「ラウンドアップ」「プリグロックス」など非選択性茎葉処理剤の散布において、風の強い日の散布は周辺水稻へ飛散する危険が大きいため必ず避ける。(場合によっては枯死まで至る)

2) 播種後対策

播種直後に土壌処理剤を散布し、雑草防除を行う。特に、近年問題となっているホオズキの発生が多い圃場では、「ラクサー乳剤」「フルミオ WGD」が効果的である。

アサガオ類の発生が多い圃場では、「トレファノサイド乳剤」播種直前土壌混和处理で発生量を減らすことができる。

土壌処理除草剤の効果を高めるため、碎土・整地を丁寧に行い、播種後の鎮圧を必ず実施する。液剤の場合は、使用基準内で、多めの散布水量で散布する。

なお、播種直後の散布でも隣接圃場の水稻へドリフト防止のため風速と風向きに注意し、風が強い日には散布しない。

3) 難防除雑草への対応

アサガオ類やホオズキ類が圃場内に発生している場合、多発すると大豆の作付け自体が困難になるため、発生が少ないうちに、雑草の開花や結実前までの茎葉処理除草剤のスポット処理や手取りの防除に努める。既にアサガオ類が多発している圃場では、トレファノサイド乳剤の播種直前土壌混和处理（播種前に 200～300 ml/10a 散布→速やかに荒起→播種）で密度を低減できる。

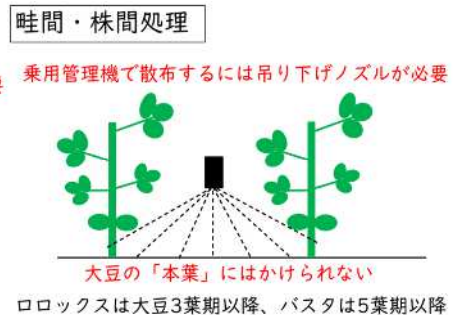
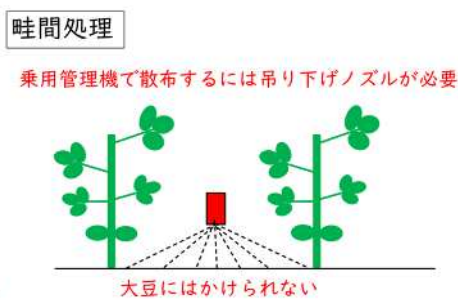
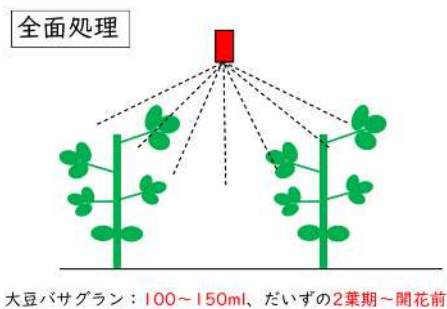
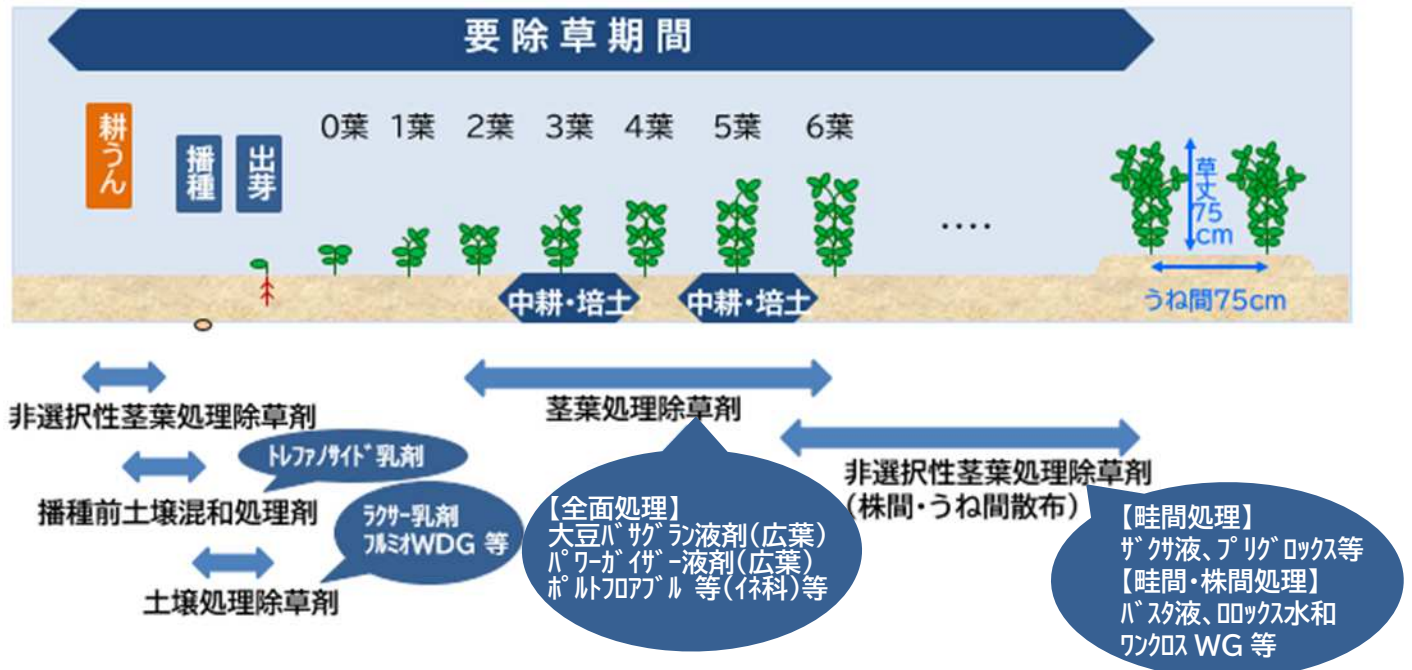
ツユクサ類（近年、特にカロライナツユクサが蔓延）は土壌処理剤の効果が十分ではないため、「プリグロックスL」や茎葉処理剤（大豆バサグラン等）での除草を基本とする。

4) 中耕培土

大豆は初期生育が早く、大豆の茎葉が繁茂することで雑草発生を抑制できるので、雑草の発生が少なければ、大豆生育期（2～5 葉期）に中耕培土で防除が可能である。

※降雨等で除草剤の散布ができなかった圃場では、早めの中耕培土で雑草対策を行う。

■除草技術と実施時期の目安



令和8年産 水稻生育期間気象グラフ

(アメダス観測地点：佐賀, データ更新日：7月17日)

三神農業振興センター

